様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18320024
研究課題名（和文）　最澄および天台宗の思想・活動から見た神仏習合思想の受容と展開に関する研究
研究課題名（英文）　A Study of the Amalgamation of Kami and Buddhas Viewing from Saicho and Tendai School

研究代表者
吉田　一彦（YOSHIDA KAZUHIKO）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号:40230726

研究成果の概要：本研究は、日本の宗教、思想、文化を考察する上で重要なテーマとなる「神仏習合」について、日本・東アジア思想史の視角から研究したものである。神仏習合は、かつては日本国内で内在的に成立、展開した日本独自の宗教文化だと考えられてきたが、そうではない。日本の神仏習合は、中国の神仏の融合の思想を受容、導入して開始されたものであって、8 世紀前期ごろからはじまり、中期、後期と流布、進展していった。本研究では、最澄および天台宗の思想･活動を分析する作業を中心に、中国の神仏融合の思想や宗教的聖地のあり方が、どのように日本に導入、受容され、発展していったのかを解明し、日本の神仏習合の歴史的展開の様相とその特質を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総　計	5,500,000	1,650,000	7,150,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：日本思想史、神仏習合、最澄、天台宗、本地垂迹、文化交流、山岳寺院、神社

１．研究開始当初の背景

（1）日本の思想史を解明する上で、神仏習合は重要な研究課題となる。神仏習合と言うと、日本にのみ見られる現象だと思われがちであるが、そうではない。宗教の複合、融合は、世界の宗教に広く見られる現象であって、決して、日本にのみ見られる現象だというのではない。東アジアにおいても、日本に先立って、すでに中国において神仏の融合が行なわれ、歴史の中でそれが進展していた。

（2）研究史を振り返ってみるに、神仏習合については、辻善之助の古典的な研究以来、日本国内で、成立、展開したと理解する内在成立展開説が長く通説の位置を占めてきた。こうした学説に対しては、津田左右吉による批判があったが、簡略な指摘であったため、不十分な批判にとどまっていた。

（3）研究代表者は、1996 年、「多度神宮寺と神仏習合――中国の神仏習合思想の受容をめぐって――」（梅村喬編『古代王権と交流　4 伊勢湾と古代の東海』名著出版）を発表して、内在成立展開説を批判し、日本の神仏習合は、中国の神仏融合思想である「神身離脱」「護法善神」の思想を受容して成立したものであることを論じ、学界に一石を投じた。本研究は、そうした視角をさらに発展させ、東アジアの豊かな文化交流史の中で日本の神仏習合を研究し、その個性、特質を歴史的に明らかにしようと企図するものである。

２．研究の目的

（1）本研究は、日本の神仏習合の成立、展開の過程とその特質の解明をめざすものである。その際、神仏習合が日本列島内で成立、展開したという内在成立展開説の立場をとらず、日本に先行していた中国の神仏融合からの思想的、実態的な影響を重視し、東アジアの文化交流という視角から日本の神仏習合の特質を解明することを目的とする。

（2）その切り口としては、第一に最澄および天台宗の思想と活動に焦点をあてて、そこから神仏習合研究に新展望をもたらしたいと企図している。最澄は入唐して中国で仏教を学んだが、彼が訪れた天台山では、仏教と神信仰・道教との融合が進展していた。最澄が本拠地とした比叡山の神仏習合と天台山の道仏融合とを比較研究して、この課題の解明をめざしたい。比叡山には、中国の宗教的聖地天台山を模倣し、日本にも神仏融合の山岳寺院を展開しようとしたという側面があり、それは後世に大きな影響を与えた。日本では、以後、山岳寺院が各地に展開していったが、それらの中には神仏習合の宗教的聖地という性格を形成していくものが少なくなかった。その歴史的展開を正しく位置づける作業は大きな課題となろう。

（3）また、古代の神仏関係という観点から言うと、『日本書紀』の読解が解明すべき大きな課題の一つとなる。『日本書紀』には、仏教伝来以来、仏教と神道とが対立して廃仏が断行されたという記述があるが、これをどう読解するか。また、廃仏と戦って仏法興隆をなしとげたという聖徳太子をどう読解し、どう評価するか。さらに神代紀の神話をどう読解するか。この研究では、中国思想の受容という観点から、これらの問題の解明に取り組むことを第二の課題としたい。

（4）平安時代～中世にかけては、①旧仏教（古典仏教）における神仏習合の歴史的展開の解明、②聖徳太子信仰の発達の様相の解明、また③新仏教では、初期真宗における太子信仰、習合信仰との関係の解明を研究課題として設定した。これらは、日本の思想史、文化史を考察する上で重要な論点となるものであり、本研究課題の視角から、これらの問題に一定の展望を見出したいと考えた。

（5）共通性と差異の解明。

中国の神仏融合と日本の神仏習合とを比較対照する作業は、一方から他方への影響関係を明らかにする営みになり、両者の共通性、さらにはアジアに展開した神仏融合の共通性を解明する作業になる。だが、同時に、これまで明確化されることのなかった両者の差異を解明する作業にもなる。日本の文化、思想の個性と特質は、こうした研究方法によって明らかになるものと考える。本研究では、日本の文化、思想の個性と特質の形成過程を歴史的に解明する作業に寄与したいと考えている。

３．研究の方法

（1）日中の文献の比較研究。

研究の中心になるのは、日本と中国の文献史料の比較研究である。中国の神仏融合の思想がどのように日本の神仏習合に影響を与えたのか、この方法によって検証していく。両者に共通する用語、概念、思想を抽出することによって共通性を明確にし、その上で、一方に見られるが、他方には見られない部分、すなわち差異の部分をも明らかにしていく。

中国の仏書、たとえば『出三蔵記集』『高僧伝』『続高僧伝』『広弘明集』『集神州三宝感通録』『法苑珠林』『宋高僧伝』『仏祖統紀』などには、日本の仏教関係史料、歴史関係史料と共通する文言、用語、概念がしばしば見られる。これらの史料の比較研究は大変重要である。また、最澄および天台宗という文脈からすると、『国清百録』『天台山記』との比較研究が重要になる。これら中国史料と日本の史料との比較研究によって大きな成果を得ることができた。

比較研究は思想史、文化史研究の古典的方法であるが、研究の細分化が進展しているためか、残念ながら、現在、こうした方法はあまりとられていないように感じる。本研究では、この方法をとることによって、神仏習合研究に新しい展望を見出すことができると考えた。

（2）国内調査

国内の調査では、叡山文庫、国内諸寺院、諸神社、山岳寺院、民俗芸能・儀礼、その他の史跡などの実地踏査、史料調査、写真撮影を実施した。

特に旧仏教（古典仏教）の寺院、それらと

関連を持つ神社、さらに新仏教では真宗寺院、特に初期真宗の寺院の調査に重点をおいて現地踏査、史料調査を実施した。
また、叡山文庫に所蔵史料の閲覧を願い出て、閲覧、調査の上、複写を入手した。

(3) 国外調査
国外調査としては、平成 19 年度に中国陝西省西安市およびその周辺の寺院、寺院跡、博物館等の調査、平成 20 年度に中国浙江省天台山の寺院・寺院跡の調査を実施した。
西安の調査では、慈恩寺（大雁塔）、青竜寺、興教寺、香積寺、草堂寺、大興禅寺、薦福寺（小雁塔）、法門寺、西明寺跡などを踏査し、臨潼博物館において慶山寺遺蹟出土遺物、壁画などを見学し、陝西省歴史博物館、碑林博物館、法門寺博物館などでも出土遺構、遺物、壁画、石碑、仏像などの関係史料を見学した。
天台山調査では、国清寺、赤城山、太平寺跡、修禅寺跡、智者塔院（真覚寺）、智顗の説法岩、土地神廟、高明寺、華頂寺、天封寺跡、上方広寺跡、下法広寺、中方広寺、万年寺、桐柏宮、清心寺跡、伝教寺跡などを踏査し、天封寺跡では学界未紹介の石碑を発見、写真撮影した。また、臨海の竜興寺、天寧寺、新昌の大仏寺も踏査した。現地を歩くことによって多くの知見を得ることができた。
中国の寺院では、しばしば伽藍を守護する伽藍神が伽藍殿などにまつられる。それは関帝である場合が多いが、他の神であることもあり、天台山の国清寺のように神仙（山神）が祭られている場合もある。また、道教の道観に仏教系の尊格がまつられることもある。済公信仰のような個人に対する信仰もある。これらの調査では、現地を踏査し、中国の神仏の融合形態と日本の神仏習合とを比較検討して、両者の共通性と差異について多くの知見を得ることができた。

(4) 調査資料の整理
研究補助者に依頼して、調査で得た史料の電子化、写真資料の整理を行なった。

(5) 研究会
研究代表者、研究分担者で組織した「神仏習合研究会」を中心に、「日本思想史の会」や「日本書紀の会」も活用して、毎年、研究会を数回開催し、研究代表者、研究分担者、招聘研究者の研究発表、質疑応答を行なって研究を深めた。

４．研究成果

(1) 最澄および初期天台宗の神仏習合の特質を中国の神仏融合との交流史の中で明らかにしたこと。
最澄の神仏習合は、『叡山大師伝』によるなら、奈良時代以来の「神身離脱」「護法善神」の思想に立脚するものであった。最澄は入唐以前からこうした思想を学んでいたが、入唐によりこの思想がより明確化し、帰国後は、その多彩な活動の中で、神仏習合の方面でも新機軸を打ち出した。それは、中国風の本格的な山岳寺院の建立、それも神仏並立、融合の山岳寺院の建立であった。最澄が学んだ天台山では、その山神である「王子喬（太子晋）」に対する信仰があり、仏教と並んで道教が発達し、寺院、道観が並立していた。智顗によってこの山で天台宗が勃興して後は、山神は「山王」と呼ばれるようになり、やがて寺院内にも彼がまつられるようになっていった。最澄は、帰国後、神の山であり、すでに比叡社（日吉社）が存在していた比叡山に、比叡山寺（のち延暦寺と号す）を建立した。それは、深山幽谷に立地する日本最初の本格的な山岳寺院であった。最澄は、比叡山の神を中国風（天台山風）に「山王」と呼び、雨を祈るときは仏菩薩とともに山王にも祈願した。比叡山の寺院、神社のあり方は、天台山を模倣して構想されており、これ以後、神仏習合の一つの姿を示すものとなっていった。やがて、日本では、神仏習合の山岳寺院・神社が各地に展開していくが、その端緒は比叡山に求めるべきであり、比叡山延暦寺成立の歴史的意義はこの点にある。
これについては、後掲論文①を参照されたい。

(2) 本地垂迹説の成立過程を明らかにしたこと。
「垂迹」の思想は、僧肇『注維摩詰経』序にはじまるもので、以後、中国では「迹」と「本」の概念を用いた二元論的経典解釈が進展していった。日本では、８世紀中頃の智光『浄妙玄論略述』に「垂迹」の語が見られるのが初見であり、以後、最澄『守護国界章』など教学書にはこの語がしばしば用いられていった。だが、それは当初は学僧たちの教学概念であり、また神仏関係を説明するものではなかった。
教学書以外となると、8 世紀最末期（798）の願文に見られるものが「垂迹」の語の初見史料であり、9 世紀以降、天台宗を中心にして、この概念が咀嚼され、学僧以外にも流布していった。ただ、当初は、「本地」の語は用いられず、「垂迹」の語が単独で用いられていった。また、初期の「垂迹」概念は神に限定されるものではなく、聖徳太子、王など、人間を垂迹とする場合もあった。やがて「垂迹」は「アトヲタレル」という訓みで日本文化に浸透していった。他方、「本地」概念は、「垂迹」とは別の文脈から用いられはじめたもので、日本では 11 世紀から用いられはじ

め、やがて両者が結びつけられて「本地垂迹説」が成立し、神仏関係を説明する思想として確立していった。「垂迹」も「本地」も中国仏教に見られる概念であるが、この二つを結びつけて神仏関係を説明する「本地垂迹説」は、中国には見られないもので、日本で成立した思想と評価すべきものである。

これについては、後掲論文⑲を参照されたい。

なお、この論文⑲は学界に好意的に受けとめられ、たとえば2007年の奈良国立博物館「神仏習合」展では、この学説を大幅に取り入れる形で企画展が組まれた。同展図録『神仏習合』(奈良国立博物館、2007年)の解説論文には⑲が引用され、この見解に立脚して解説が書かれている。

(3)『日本書紀』仏教伝来記事にはじまる一連の仏教関係記事を解析し、これを経典・仏書との関係から読解してその全体構想を明らかにしたこと。その中で、同書の「仏法」と「神道」について明らかにしたこと。

『日本書紀』仏教伝来記事には、『金光明最勝王経』、『高僧伝』「竺仏図澄伝」の文章などが典拠として用いられていることが知られてきたが、そればかりではなく、他の複数の仏書が用いられて文章が作られていることを明らかにし、552年という伝来年次も、中国において末法に入る年とされた年次があえて設定されていることを読解した。『日本書紀』では、廃仏を断行した敏達天皇はたちまち「瘡」の病を患ってしまい、そのまま死去してしまったと書かれているが、これは仏罰が下されたということで、中国仏教の思想の強い影響の下に書かれている。『日本書紀』の一連の記述は、「末法　⇒　廃仏　⇒　廃仏との戦い　⇒　仏法興隆」という構成になっているが、これは北周～隋にかけて中国が実際に経験した「末法～廃仏～廃仏との戦い～仏法興隆」という歴史を参照して、それを模倣し、モデル化して構想された筋立てであった。また、同書の「仏法」「神道」の語の用い方は、中国の仏書における用い方を受容、模倣したものであり、「仏法」と「神道」とが対立して廃仏が断行されたというのも、上記の話の展開の中で設定された筋立てであって、歴史的事実に基づく記述とはいえないということを明らかにした。

これについては、後掲論文⑬⑥⑤④を参照されたい。

(4)『日本書紀』の〈聖徳太子〉像が成立した政治史、思想史上の背景を解明し、あわせてその後の聖徳太子信仰の展開の諸相についても展望を示したこと。

〈聖徳太子〉が『日本書紀』で作り出された存在であることについては、研究分担者の大山誠一がこれまで精力的に論じてきた。この研究期間内においては、『日本書紀』編纂者がどのような思想から〈聖徳太子〉の人物像を創出したのか、またいかなる政治状況の下にそうした作業を行なったのかについて、さらに精緻にその具体像を提示した。なお、大山の見解は、学界はもとより、学界を越えてインパクトを与えており、後掲その他②のように、マスコミを通じて人々の歴史認識にも影響を与えている。

なお、英語圏の研究者に向けて、英文で聖徳太子研究の現段階について発信した。

また、奈良平安鎌倉時代の聖徳太子信仰の展開についても研究を深め、天寿国曼荼羅繡帳、『聖徳太子伝暦』、聖徳太子絵伝、初期真宗における聖徳太子信仰などをめぐって、その一端を明らかにした。

これらについては、後掲論文⑨⑮⑱⑦③⑫を参照されたい。

(5)『日本書紀』の神話を読解して、この神話が成立した政治史、思想史上の背景を明らかにしたこと。

『日本書紀』神代紀の神話は、それ以前の古い時代に形成されていた神話が伝承されて、記録されたというものではなく、その骨格部分は『日本書紀』が編纂される中で創作されたものである。たとえば、天孫降臨神話は、「持統天皇―軽皇子」「元明天皇―首皇子」の関係が「アマテラス―天孫」の関係に投影されたものと読解すべきであって、現実の政治的課題が織り込まれたものになっている。こうした神話の構想には藤原不比等が深く関与している。『日本書紀』の神話は、したがって、同書が成立した720年段階の神観念を示した史料として読解しなければならず、政治的な神話であることを念頭において理解する必要があることを明らかにした。

これについては、後掲論文⑨を参照されたい。

(6) 日本の山岳宗教における神仏習合の姿を今日に残る行事から明らかにしたこと。

神仏習合研究の一環として、今日の神社に残る民俗行事を調査し、それがもとは神仏習合の儀礼に基づく行事であったことを明らかにした。

これについては、後掲論文⑰㉑を参照されたい。

(7) 初期真宗諸門流の社会史、思想史上の特質を解明し、聖徳太子信仰、習合信仰との関連性を明らかにしたこと。

新仏教をどう評価するかは、神仏習合研究の立場からも大きな課題となる。この研究期間内には、本格的な取組はできなかったが、予備的な考察として、初期真宗の寺院を調査

し、その特質についても考察した。初期真宗は強い聖徳太子信仰を持ち、またその高僧連坐影像は習合美術の大きな影響を受けている。初期真宗の諸門流やその法物について、調査結果を論文にまとめた。
　これについては、後掲論文⑩⑪⑯⑳②を参照されたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（21 件）
①吉田一彦「最澄の神仏習合と中国仏教」『日本仏教綜合研究』7、頁未定、2009 年、査読有

②吉田一彦「名古屋市珉光院の歴史と文化財」名古屋市立大学大学院人間文化研究所『人間文化研究所年報』4、9-15、2009 年、査読無

③脊古真哉「遊行寺蔵『聖徳太子伝暦』と四天王寺蔵六幅本聖徳太子絵伝―聖徳太子絵伝の展開に関する予備的考察―」『同朋大学仏教文化研究所紀要』28、11-28、2009 年、査読有

④吉田一彦「僧旻と彗星・天狗―『日本書紀』と経典・仏書―」『東アジアの古代文化』136、54-67、2008 年、査読無

⑤吉田一彦「『日本書紀』仏教伝来記事と末法思想（三）」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』10、356-368、2008 年、査読無

⑥吉田一彦「『日本書紀』仏教伝来記事と末法思想（二）」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』9、175-186、2008 年、査読無

⑦吉田一彦「天寿国曼荼羅繡帳銘文の人名表記」中部大学国際人間学研究所『アリーナ』5、236-249、2008 年、査読有

⑧吉田一彦「古代国家論の展望―律令国家論批判―」『歴史評論』693、27-40、2008 年、査読有

⑨大山誠一「〈聖徳太子〉誕生の時代背景」中部大学国際人間学研究所『アリーナ』5、150-185、2008 年、査読有

⑩脊古真哉「専海系三河門流の北陸への展開―高僧連坐影像二点の紹介によせて―」『親鸞門流の世界』（早島有毅編）法蔵館、83-120、2008 年、査読無

⑪脊古真哉「絵画史料から見た初期真宗の痕跡―もう一つの三河・信濃・遠江国境地域の姿―」『同朋大学仏教文化研究所紀要』27、27-46、2008 年、査読有

⑫脊古真哉「「山の民」の聖徳太子信仰―初期真宗絵画史料を手がかりに―」中部大学国際人間学研究所『アリーナ』5、290-297、2008 年、査読有

⑬吉田一彦「『日本書紀』仏教伝来記事と末法思想（一）」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』7、171-186、2007 年、査読無

⑭大山誠一「吉野の誓いと天武の王権」『中部大学人文学部論集』17、1-11、2007 年、査読有

⑮大山誠一「聖徳太子論のその後―『日本書紀』と王権の虚構―」『史聚』39・40、41-56、2007 年、査読有

⑯脊古真哉「荒木満福寺考―満福寺歴代の復元と源海系荒木門流の拡散―」『寺院史研究』11、1-28、2007 年、査読有

⑰脊古真哉「神社とムラの祭り」『静岡県民俗学会誌』25、67-74、2007 年、査読有

⑱Kazuhiko Yoshida「The thesis That Prince Shotoku Did Not Exist」『ACTA ASIATICA』90、1-28、2006 年、査読有

⑲吉田一彦「垂迹思想の受容と展開―本地垂迹説の成立過程―」『日本社会における仏と神』（速水侑編）、吉川弘文館、198-220、2006 年、査読無

⑳脊古真哉「飯田の寂円と和田の真寂―三河と南信濃に展開した源海系荒木門流―」『同朋仏教』42、19-41、2006 年、査読有

㉑脊古真哉「長滝白山神社の六日祭―修正延年に含まれる田遊び―」『中日本民俗論』（静岡県民俗学会編）、岩田書院、378-412、2006 年、査読有

〔学会発表〕（計 4 件）
①吉田一彦「最澄の神仏習合と中国仏教」日本仏教綜合研究学会、2008 年 12 月 14 日、早稲田大学

②吉田一彦「最澄と初期天台宗の神仏習合」平安寺院史研究会、2008 年 12 月 13 日、國學

院大學

③吉田一彦「飛鳥仏教・聖徳太子をめぐって」宗教史研究会、2007 年 12 月 15 日、愛知学院大学

④吉田一彦「鎮護国家考」仏教史学会例会、2007 年 7 月 21 日、仏教大学

〔図書〕（計 4 件）
①吉田一彦、女性と仏教・東海ネットワーク（ブックレット）、『日本史の中の女性と寺院』2007 年、全 62 頁

②吉田一彦、吉川弘文館、『古代仏教をよみなおす』2006 年、全 249 頁

③吉田一彦、風媒社、『民衆の古代史』2006 年、全 240 頁

④ Paul Swanson, Clark Chilson, Kazuhiko Yoshida, etc, University of Hawai'i Press, 『Nanzan Guide to Japanese Religions』2006、共著、144-162

〔その他〕
①新聞報道。朝日新聞［大阪版］2008 年 1 月 5 日号「ニッポンの面」において、吉田一彦の「神道」の理解が紹介された。次いで、同 2008 年 1 月 12 日号「ニッポンの面」において、吉田一彦の『日本霊異記』を題材にして古代の国家、社会、文化・思想の実相を検証するという視角が紹介された。

②新聞報道。毎日新聞［夕刊］2007 年 6 月 5 日号の文化・批評欄において、「「聖徳太子非実在説」の 10 年／進む大山誠一氏の研究」と題して、大山誠一の聖徳太子・聖徳太子信仰研究が紹介された。

③新聞記事。吉田一彦「古代の民衆の実像を求めて」中日新聞［夕刊］2006 年 8 月 3 日号文化欄。

６．研究組織

(1)研究代表者
吉田　一彦（YOSHIDA KAZUHIKO）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号:40230726

(2)研究分担者
大山　誠一（OYAMA SEIICHI）
中部大学・人文学部・教授
研究者番号:90410670

脊古　真哉（SEKO SHINYA）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・研究員
研究者番号:20448707